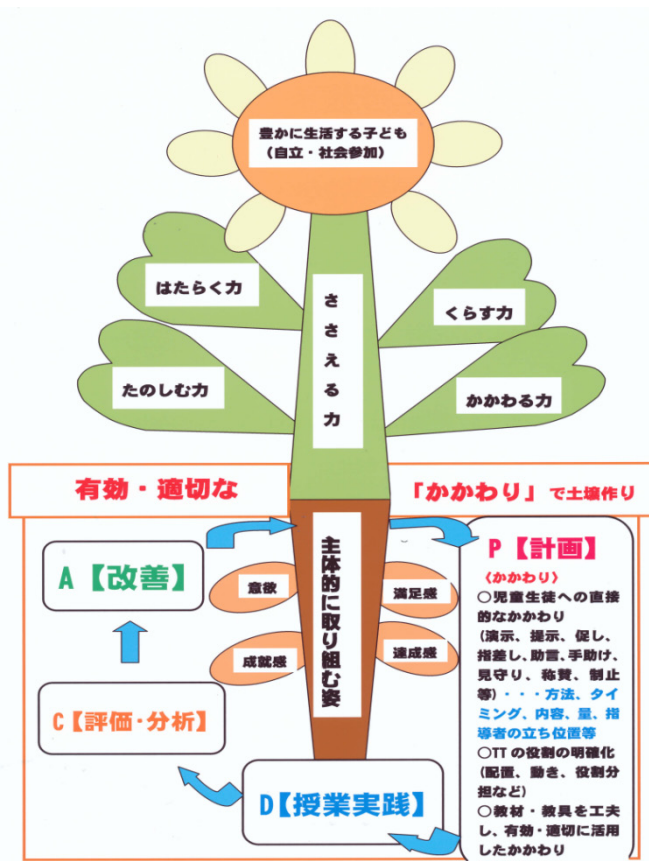


## 1 テーマ設定の理由

本校は、めざす児童生徒の姿を「豊かに生活する子ども」とし、児童生徒の自立と社会参加、たくましく生きることのできる人間の育成をめざしている。「豊かに生活する子ども」を育成するために、「ささえる力」「くらす力」「かかわる力」「たのしむ力」「はたらく力」の5分野の力を小・中学部・高等部で一貫して育成していくことが大切である。その5分野の力を育成するために大切になってくるのが、指導者から児童生徒への「かかわり」であると考えた。「かかわりに着目した授業づくり」とは、児童生徒が学習のねらいを達成するために、指導者が学習環境（人的環境・物的環境）を工夫し、有効・適切な「かかわり」を行って5分野の力を育成していこうとするものである。指導者から児童生徒への直接的なかかわりの方法やタイミング、内容、量を考えて行ったり、TTの役割を明確にして効果的に取り入れたりするだけでなく、教材・教具を工夫し、それらを有効・適切に活用して児童生徒にかかわることで学習効果があがると考える。このように、指導者がかかわりを一層工夫した授業を行うことで児童生徒の意欲がより喚起されたり、何かを成し遂げた達成感や認められた充足感を味わったりし、もてる力をさらに発揮して主体的に活動できるようになるのではないかと考え、それが現在から将来にわたっての「豊かな生活」につながるのではないかと考え、本テーマを設定した。



## 2 研究内容

- 職員研修や授業を通して、有効・適切な「かかわり」の方法を研究する。
- 授業実践のPDCAサイクルの進め方を工夫しながら授業改善を図る。

### 【具体的な取組】

- 学部の実態に応じた「有効・適切なかかわり」の共通理解
- 1人1授業研(1人1回公開授業・1回以上授業参観)
- PDCAサイクルでの授業改善(評価改善シートの活用)
- 授業グループミニ事後研の実施
- 個に応じた「かかわり」について整理

- 学部ごとに「有効・適切なかかわり」についてまとめ
- 職員研修

### 3 スーパーバイザーの役割

鳥取大学地域学部地域教育学科の三木裕和准教授をスーパーバイザーとしてお迎えし、年間7回ご指導をいただいた。今年度は、本研究テーマでの研究(2年次計画)の1年次にあたるため、年度当初に三木先生から研究推進計画についてアドバイスいただいて研究をスタートさせた。その後、2回の講義を通して様々な障がいの特性に応じた「かかわり」について全職員が共通理解し、研究の取組の方向を明確にすることができた。また、2学期に実施した2回の校内授業研究会では、三木先生に授業を参観していただき、授業改善への具体的な助言をいただいたり、「かかわり」をキーワードにしたテーマでご講演いただいたりして、その後の授業づくりに活かすことができた。

#### ① 職員研修会

##### 【講演】

- 「実践のためにまずここからー自閉症児の教育課題を中心にー」(4月13日)
- 『授業研究と「教師のかかわり」』(6月13日)
- 「重症児へのかかわり～気持ちや動きを引き出すために～」(11月21日)
- 『自尊感情・自己肯定感をはぐくむ授業づくり～「かかわり」に視点を当てた取り組み～』(2月6日)



#### ② 授業研究会等

##### 【指導助言】

- 平成24年度研究推進計画への指導助言(5月23日)
  - ・子どもとかかわるときに大事なことは、まず相手のことをよく知ること。
  - ・深く知るための3つの観点とは、「障がい」「発達」「生活」。
  - ・発達の全体像も知っておくことが大切。
  - ・教育学的な意義として「かかわり」は単独ではない。
  - ・教材で何を伝えたいか。学ぶ主体の子どもがあり、教師が媒介となって指導したりかかわったりすることで子どもは変容していく。
  - ・TTのかかわり方も授業全体の構造をいろいろな視点で見て考えていく。
  - ・失敗のない破綻のない授業が、本当のサポートやかかわりになるのではない。
- 学部研究「1学期の取組実践報告会」(9月5日)
  - 『たんぽぽグループ 生活単元学習「みんなであそぼう」』

- ・授業のねらいが達成され、完成度が高い。
- ・教師も本気で遊ぶことが大切。
- ・教師側はルールを教えるために遊びを教える。子ども側は思い切り遊ぶためにルールがある。ルールがないと遊べないことに気づく。子どもがしっかりと遊びこんでいる→「今日はおもしろかった！」→その結果、社会性が身につく。



### 『さくらグループ 生活単元学習「水遊びをしよう」』

- ・集団の雰囲気維持しながら工夫された授業であった。
- ・素材のおもしろさ→自由遊び→対人関係・・・流れが工夫された授業展開になっていた。
- ・自閉症・・・視覚的情報でわかることがいっぱい。新しい遊びに誘うことは難しいが、本人独自の遊び方が工夫・展開されていてよい。(キーパーソンが誘っているのもよい。)

### ○全体授業研究会 (9月26日)

#### B 小学部たんぽぽ 自立活動「力を合わせる GWT」

- ・聞きたくなるゲームが教材としてあり、教材のおもしろさ、聞きたいというモチベーション作りができています。
- ・聞き洩らすと分からなくなるような内容を授業に組み入れていってもよい。
- ・○×評価ではなく、まとめて評価したり、具体的にアドバイスしたりするのが現在の生徒の実態に合った評価である。具体的に良くなっていく自分分かる評価へ移行をしていく必要がある。(系列的評価、だんだん評価)

#### B 中学部 C グループ 国語「くらよう祭の招待状を出そう」

- ・先生に認められることにプラスの価値をもっている。緊張は値打ちのある緊張で、良い人間関係の中で培われている。
- ・書き言葉ので表現できる論理的思考ができなくても、「ごじょごじょ書き」で、伝えたいという気持ちを救いあげることが大切。



### ○全体授業研究会 (11月21日)

#### A 中学部1組/高等部2組

##### 自立活動/ひょうげん「秋満喫！おいもとうんとこしょ！」

- ・感覚的に嫌なことに慣れさせるのではない。安心できる先生との関係を作ることが大切。←「言葉でお互いの関係を確認」し「人間的共感、喜びを感じるためにことばを使う」「ことばがおもしろいということがわかる」ことが一生を支える。
- ・授業の振り返りは、教師が評価するのではなく、ことばをかけ、目の前にない過去を思い出させることが大切。

- ・障がいのある子も教養のある子に。小さい頃から教えられていると一生の幸福を高める力が高まっていく。(文化的な活動に対する信頼感)

### ③ 全体実践報告会 (2月6日)

#### 【指導助言】

##### <小学部実践事例>

- ・劇遊びは、教師が教材のおもしろさを生徒に伝える。子どもが「やりたい!」と思うために、教師がモデルでやって見せて(指導)、物語へのあこがれをもたせることが大切。

##### <中学部実践事例>

- ・自閉症の生徒に対しては、怖がるもの(着ぐるみ)を、不用意に提供するのはよくない。「守ってあげる。」というサインを大人が出すことが大切。
- ・教材そのもののおもしろさを大切に授業作りをしていく。
- ・1対1のスケジュールは、本人が主体的に選択したり、判断したりするのではなく、マッチングで抜け出せなくなる面もある。

##### <高等部実践事例>

- ・進路の問題は、難しい。知的障がいのある子どもは、過適応になりつづれることがある。働くことや青年期らしい労働の喜びは教えるべきではあるが、企業社会が求めることと同じことを求めてはいけない。障害者権利条約のことや働く上で合理的配慮がなされなくてはならないということも伝えていかなくてはならない。



## 4 成果と課題

#### 【成果】

- ・三木裕和先生から講演や指導助言等を通して多くのことを学び、日々の実践に活かして専門性の向上を図ることができた。
- ・「かかわり」を意識し、授業の構成、教材作り、生徒の目標について深く考えて授業をつくる意識が高まってきた。
- ・1人1授業研を実施し、授業公開、参観を通して指導力の向上を図ることができた。
- ・学部ごとに「有効・適切なかかわり」について整理し、今後の授業づくりの資料とすることができた。

#### 【課題】

- ・より質の向上をめざした授業実践
- ・評価改善シートを活かした授業分析と授業改善(評価改善シートの見直し)
- ・TTの役割分担(STのかかわり方)
- ・「有効・適切なかかわり」の資料の活用